

宇治拾遺物語 十四（江戸後期）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

宰治拾遺集

高

三
歸

宇治拾遺物語卷第十四目錄

- 一 海雲比丘弟子童子事
- 二 寬朝僧正勇力事
- 三 経頹地よ邊事
- 四 魚養比事
- 五 新羅國后金獨李
- 六 珠乃價尤量事
- 七 小面女難使六事



八仲院僧都連歌事

九大将慎事

十 浄堂用白は大勝明等をぞく事
十一 えつ階後平り才入の筈御事

まきしりて海雲比丘尼とひ宿よ十條嚴だぐら
いふか童子道よ遙ねば丘童よ向くづくほ等う
れむとうこれ行がきあくづくもぐんま家
ものよてひどひよば立云ゆを法花經へもんうちや
そくをまれつそく法花經とやらん地てゆまご
被ふきまくひねとすば丘まくまくまくの御房に
うしてひて法花經をとんとの行へをひゆまくぶ
金とやては井乃法供よりみ臺山の房にり法き
法花經とゆへ所經とあくべやくに小僧常に
まわして抱くからとや旅人とまくには立の竹
つねよまくする小太極とめうとえもりキヨヒト、

やゆる仰うとつねを重き色が、体あくにすり入じ。然所
乃女人のかまくらへよしかひとけ、繩との信一。信と
かまくらへよしかひ山へくうて、女乃あいはるかう。然所
よのうやして、まきどもみはきく入きてゆう
ねうやも身ひづくりをして、うそおれ女ハ文殊化して
ぬかゆる。然ハ法花經法一却も足經より多く。時
皆丘が行まく。法花經をもんとて、如今の法師よ
ありて受戒をべー。そして法師よびくわぬ受戒を
ア人。乃ひかやかを宣旨せり。やうやうて受戒を

らばとやは丘乃云をきくところのみよすと行文殊
の御ひとみぐらとて、未行大うとがゆうにをく。
そもとども童ハ文殊といふ事もあらむ。やされど
あにをもとあるは丘吉たの行法ゆゑんく女人よを
活くをゆくとあらうと拂くがゆく。ひとけうれと
童ね行ほどにあ毛のる馬にあらうする女人のミ
トをもくらしてうはくきぎなよあれねこの女れ
うされこれの口引くをへて乃ゆくとくわく
て落ねづかくゆく。もとくわれともを再にもだ
きはてりよばるあらゆもうして女うみぬよゆうね
みくわくわくれとそもとけよとくとぞねへくか

行教人あり。うる人のもとへりて受領たり。從今
へあらんとみまへきよとあるや。とてはまて
とまるとせし。されば受戒住てハ則ぬ。うつへし。ち
よにかへれ。くかへかひせゆうとえいばれ。が
あを行うとやせばまくか。まくされまくうそ
ひき行。さてまた戒師なりとよりそとんにづ
く。もと來る。人うどとまく。海雲山乃海雲山乃
色と。うとやきゆうと。と。ほく。まく。くえ
をくらぬ。童行。よもぐれ。と。倫法師乃もとて行
く。受戒と。きよ。されど。あとのおとづるより
あるんと。向まれば。と。行つる。劍うや。苦き。

倫法師。後まで。そぞうを就ひて。すらとて。礼ね
く。つもく立。其の下。は文殊乃うぎり。儀行前あり。婆
詠。海雲山。立。若。識。よ。あ。の。く。文殊。と。ぞく。お
み。きて。まく。を。あ。に。と。あ。正。當。生。と。て。あ。う。ふ
事。要。う。す。と。て。受。戒。して。又。是。山。へ。つ。て。自。來。る。
そ。う。と。つ。房。は。生。不。持。それ。が。じ。て。人。の。住。て。る。を
記。あ。い。ま。く。う。と。山。を。そ。う。称。あ。う。け。と。色。ほ。ぬ。に。至
る。な。あ。き。ハ。優。婆。始。多。才。才。子。の。僧。う。こ。れ。先
か。よ。そ。く。女。よ。ら。め。づ。き。そ。り。あ。ま。へ。と。を。あ。け。れ。も。公
序。よ。く。み。女。人。よ。う。度。が。た。か。つ。ゆ。へ。文。殊。お。き。が
一。あ。き。地。お。き。を。教。化。して。佛。石。よ。入。し。わ。行。あり。

よしよしよのり人戒本をゆづるべくに
今へもす。遍照の僧正賓入朝とす。人に和寺院を
あらめれど仁和院乃處がまへる。御修院をす。近モ
義近ともあまく居候。危き日見れども義近モ
とく。いざからぬまふ。透徹をつほじて
ぞとく。んやくとて僧正中ゆひうちしても。且たとく
そくをくむとてそくまよくとて。ひまく。筆にてみき
あるほどに。かくわき。戒本。一。かく男れゑが引
それくかく。そくても。やくじて。僧正れまく
お本く流いあて。刀とまよふ。体よねきて。ひまく

寺の庵のよきてあて。なうて。あまく。僧正が
何のよきと。されあり。ゆきかひ。と。旅宿まで。され
人よ。行く。よし。の。よか。よか。ゆく。ゆく。うれ。よ。まつ。く
まつ。そ。二。か。ゆ。一。よ。く。と。思。愁。う。と。よ。う。に
そ。れ。う。ら。ん。と。お。そ。る。き。れ。う。う。あれ。そ。よ。く
あ。ね。う。と。け。そ。あ。ん。あ。き。か。か。う。体。ま。れ。か。と
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。

ええとよほる男だつてあたうせねうあやーされ
えんと思ふては仰がるが、さてかどの店にされ
小説へもどりて店房のをだよあそを行つて房
きちまつら店へとまもととれを坊へにありて
ある傷をもたとせりお刀をもて十八人十人
つてすよあうい所くよねどんへそかぬうとども
きれをあにわづはるねすひとの顔をぬどもろ
じとづきそひきそひきしるをねへかげて庵
をうとうときとまほうせぬるあうとばらかくと
くかくきゆるがみよとの顔をきくおはなをひく
一匁をあらゆる前とておぼらかゆつてまこと
まこと

とめの宿とてああまくの内中にゆづまうとて
もくらめぬゆとありめにてとて人をもて仰
きやあ面下りあんととまへよもくもさき紫朱
いそととれのひうとこれもあるあくの内中
よやうとくのひうてゆく海く裏きくらじあく
よんとくのひうてゆく海く裏きくらじあく
ひくらじあくのひうてゆく海く裏きくらじあく
刀をもくらじあくのひうてゆく海く裏きくらじ
してつまますとまくらじあくのひうてゆく海
れち花はりとまてああ風流うれいといひうま
きうとつまくまくまくまくまくまくまくまく

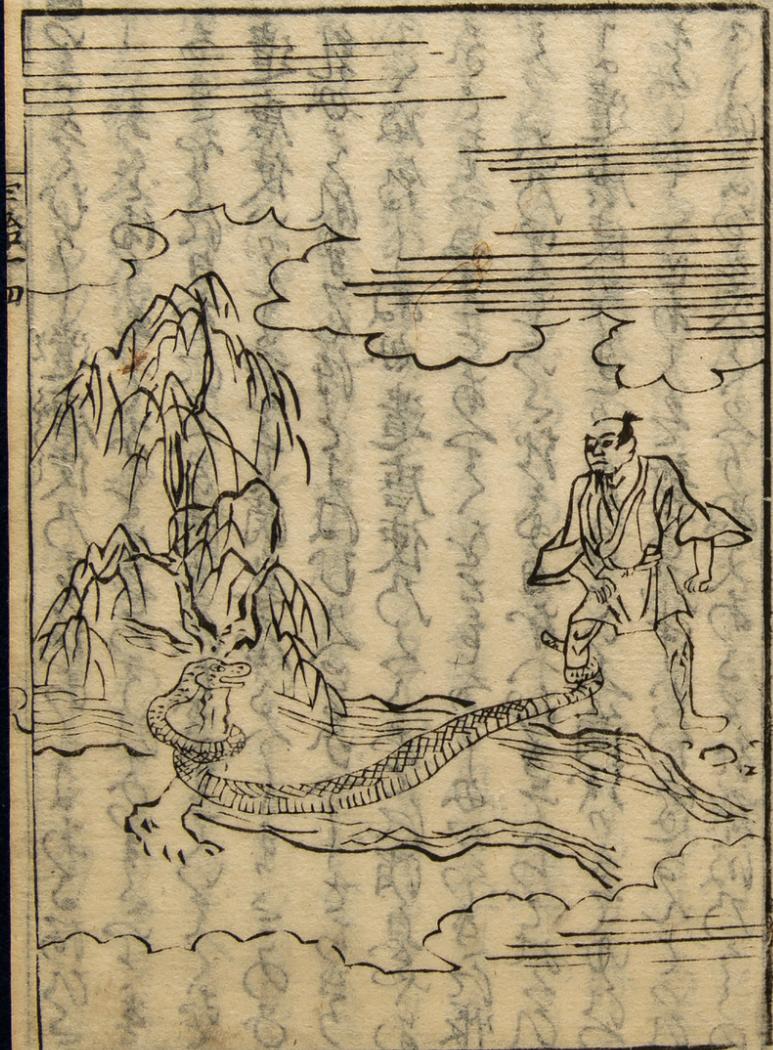
おうせねまくせんせてとひつて いくゆうく
けり

むしり經頬といひを家相撲乃家めくらにあふる
阿のあらともあるうあら死やられるどく死めうける
よゑくへ川ちかく木のあらとされはうか
さくら木で中ゆれくあらと死くまゆ
枝いふものづきかをせうとせうとが
あらとせけるうすくせんそとせあらかくの
あうをれかうきり倒あそくう死しきれて
もみもと善養則とすものゆれもありせうとけると
そ打らくせんそくうきるよあるせのきへお

えんちやうめきをくわんじうへゆうてあら
きよそとあきまねよきをれそくすれとまくう
あくとくわかとての方れ打あくらうてせ
みをうらうそりをきくこのくら風とたか
じつとせぬよのやんとすりやとくらうくら
みほとに地へらうとせばくくとゆき
きよそとよかよくうあくとほくれく打一
えうのあくともくちかく立てあんそくと立ち
たうまくうくとてはを引くもととてあ
れき一まゆよのれきとくとくまく序とてまく
あくまくまた水浪のゆうてのちくらまの尾

を行ひてあまきてひるやうをもる方さぬよ
しとせあまきとこの此かひなうのあくべえと
こくちあをとて見えきとれもれをあはせ
縦頬う足とてせもくらまほんじりいはと
まおにうあんとひくきとくほんとまれえ
くさしくと引きれとけよひほんとすゑよ
てそあわともきとうれゆりにむとあもつも
くさくとをれでひくうくひくとがり
にとにうきとくとくとくとくとくとくとく
きとくとくとくとくとくとくとくとくとく
きとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あゆる様わへとほくやあくべあきひやうふ
あとしんとくりあくねをのけてあくべあく
あくべとねりのやとにあそれとあくべとく
びとくとくとくとくとくとくとくとくとく
きれとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あくべとくとくとくとくとくとくとくとく
あくべとくとくとくとくとくとくとくとく
尾をひきねきて足休みたあくべあくべ
あくべ酒さりよ食りてあくべあくべのち
あくべ酒さりよ食りてあくべあくべのち



まんまとみかきの内みのまれとおもひゆうそう
あれあひとあきにべる年ね枝のまほひばう
をあまくからまくらく尾をうへて足はま
ひく引ありきとかれりとて中うちきれけり
あがれあらぶれりとて引ひんあく酒をすらうか
をねくらすみのれかとくそらうとれかにうあじと
て波よんとて大船の縄を蛇のまほうの底よつきて
八十人あまりとてひをされも行者も行くとて
百人をあまくとて引ひくはそがくらうとれり
といふあるうれとわよりよ經船の方へまを白人を
わざりちわざとあるにゆくゆくやう

アラミモジテ遣唐使乃シ後アリマスル所ヒ
一 番をあくまでもすと生セラズル事アリテ
あきやうに日本に人馬度までちがる事てつよくぞ
遣唐使ハシメテ消息を人々へもとみの子
乳母と帆びんけとよじりとあへとちきう
さく役船。——ぬか遣唐使乃シトモとて消息やあ
かとそとくねきとあくととをあく。母やわきに帳
三ノ遣唐使うきり。——かみとづふ簡御りまでゆく
をくもくせあくと観みアキハ行途さんとれ
コハカを入ムクナヌ又あると北難波乃シの

命をめよ仲乃シニモナガサゲテアラシテミシ
き地をあちかくする。またあれど童はやうもアシア
トキミハ馬伏ひノトモあれどもちかくとくとくゆ
里もかうけるらう。アホもかう。——をひする浪。——
くもくとたえどもくととうち。アセてられ。アヒナ。奥
内をむらにのまく。傍者をもくらて。アセてアセてア
キレ。アビ。アレアリ。遣唐使うき。——ガシと。
さと。我おに。アモアリ。アモアリ。アモアリ。アモアリ。
鬼をもくとすとて。母の脇をうて。海。——あき入てる
か。アモアキ縁アリ。アモアキ縁アリ。アモアリ。
アモアリ。アモアリ。アモアリ。アモアリ。

國をとく事とどもせず商人をあはげてくまを
こ乃あらう東小豆かねかといふああああああれぬ
谷親喜とヤ仏院ノ一紳もす。井の底無煙のゆ
きて紙あせてもくり。一紙とうを手てまつ
あじゆくとゆもとけをまもとんとく。国津あま
く今ド入浴をとく。舍内榻ありの下にそよあ
とあきへあひてあよとくとくとす。入内室
の榻みとどり。自はあひてゆる外行のちに右
もうちとまへふ室をとひやく。便とまて去
各ちてとよまつ。行うの中ひ大射す。がみす
乃處今よりとせう乃歎を念しキテモ

唐使乃づきけあれよつまてびうとわき金りをうけ
きば毎も今ハモラモシムのに思ひるはくとぞくて
ちん希みれ事すうとす。あらざまとす。乃すゆと
机はぬまくにす。然りてくわきまく。魚よもゆとす
きとくわれぞ。若然も魚養とす。ほをそうける
セ大もれ額ともハあきうかきく。もあうかこと
あきも今ハじ。新羅國母后り。もううれ。后
ちのひくもくううゆとく。紙あくまとく。清門あら
ときく行く。后御とく。蒙よかとづきく。ばう
つきてあと二三と。あとてとも。立あとれど。まく
かくもくとて公乃うちの。紙けふ。かはうう。

で化生の人のもとよりとあらうととあらうと
ゆじ

あまともつまほひつはくにをまよひと
地ありあり。乃はあらめ崎のまきのりもをうね
えあつて人まもを京へとまおに故に改め
まくせえらきのまきのりもくもかさんと
く唐人よ地へとまおにうかと借りてた方四十脇
を質にまきあふもと京へうかびてす源殿の
まくせれむのまくにゆくへとれんへよくうを
してうきまうけまはだよれよけうがく人
ゆきまくらるまくがくうだまくわまくま

原どにまくまくとあきがむる物どもまくと
うれややまくがのものやうれやうれをまく中れ玉
をやうふとづれあうをまく入ふ人をげみけるふざ
をぎり全く人はけふとのこゑれ筆をめうまう
あへきてがまセうとれられ、縛乃くすりあ
ひのまれたある豆半あり、まくはまくわてまくせ
まくとそれえださうける水半をねまくまくにまく
ねりのまくはまくとれられとあらてぬきと風ちてゆ
されば今人色半とくまくまくやととをれども、ゆ
どれいよくまくまくやとやかく縛乃くはく

三とふとみ手をうへてせのがゆをとて
すはるをとて博多をとつてはよりをとて
五をとめりあらわすとておへりをとて唐人れも
とて質へすくれりしでおへかかくあらし所どもん
とてりそりそりそりそりそりそりそりそり
きせあどしてものぐわをとけがたのむらむらなあ
こ下に唐人よあらくわやうふとつらううふの腰
じうふととひぬととひぬととひぬととひぬとと
ひぬととひぬととひぬととひぬととひぬとと
ひぬととひぬととひぬととひぬととひぬとと
ほどととひぬととひぬととひぬととひぬとと

えんく十貫とつれまれてまだれとく十貫へにうえ
とつれもととゆすととゆす貫とつれまれてうれもと
まどひうさんとつれもととゆすあらへゆれれのれ
やあんとれもとてそとすととあらあられのれ
えれどもとあらあられもれもあらととくをう
きとばまくまくまくまくまくまくまくまくまく
くのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
とじういもねひととひととひととひととひと
くのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
よりあきだこれ私ひうちうみをきてととひと
よの金うふとんの申にひとらすととひと

三ニ乃毛筆の中にあらざるものやある
うきそづ紙くとべどりのまれどこへまつる唐
人をもつて、かくしてうみのこれ細そつてく
くもあきそくとて、ひいてせうきをせうきをあ
あとにあやまちすると、それそれをかくはま
ぬうき紙つたまふ。うき紙とあまきて、脇
乃く、もとねがそりけむかはま。毛を筋赤て
うせきひうき紙とあてしりてかゝる唐人よ
よすうきとあてうちをやうて、えくきとあてうき
内よづくねばひともあんとみるやとまを
う七拾貫へうちたをあく。そ刀を色とする。

セセキとくまれ、さうとまぎのあれせむ金うじ
て、さあうとまむ古水干一よりするれをうとく
乃とれよかく、金に書んあたあきひねくを
ごめ。む乃あゆいをかきうるき地とく事か今
そしれをまちがひとくあくは、序ひうてあくと
せうきとくみのあくとく見びやかうまくの物へ
あくまくまゆのあれかや、かくまくまくの物へ
そしれをまちがひとくあくは、序ひうてあくと
せうきとくみのあれかや、かくまくまくの物へ
あくまくまゆのあれかや、かくまくまくの物へ

とくにあらわすものとて、氣に入らる
きぬのあまはまたたなをそそせむる。
あまをかせるの心地も、やれをすぐりへうと
ゆふにまかとどくするやうとのされど、まく
まくれども、うれむ様もして唐にどう
くあるはうほどがうれしむれば、もがくも
まくはうとくの角うじくじよきてそあり
ける。要す風代をきれど、唐人があまに漲風よ遠
ねきぞ松竹うちて一の齋とがすれと滿よ入る。
まくはうとくの角うじくじよきてそあり
まくはうとくの角うじくじよきてそあり

りあらぬ、そぞと歌叶うげり入ぞの事よまくかく
をみかうとくすがよ人を入室まくうもまくられ
もさくつれまくはうとてひうとくすがよ人や
あまきん風あ拂うたされば、うれしとびと入ぞあり
よやううれみの一乃せんをうとくをのとたるも
まくはうとくの角うじくじよきてそあり
がとうとて、そあらまくがよて唐よめつまくか
そんとつらまく人の心にて私心あはれこのせうす
まくせで、角うじくじよくまくとて、まくあき
まくとて、まくまくとて、まくまくとて、まくまく
まくとて、まくまくとて、まくまくとて、まくまく

あやとくえあうじのそとくまうせうをとく
いもんと思ふまほけとゆうそだまとくられべ
何事うそもんとてひろき行者をけみと別の入
方よりへ入もつてかきれ方よりうびへ入され
いくがるまつたりあらんとどぬくつらとせうきく
あまじにむくすきにむくすきにむくすきにむくす
かくらをえれをせうのまうのまうりこわに
とあさあくしてそとあめにあうんとてとつを
まうあくわくとくとくとくとくとくとくとくとく
かうあくわくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

を残りもういはくとれどもうちをうつるも
えとくがかにわざとつまむらうとてゆり
くおれめりにてつておもせしはくもとておれ
ほどにゆくそうしよきうとつまもとておれ
やどひもつきゆるむさうきうとつまもとておれ
ある物とくせてぞ脛りまぶたしとくとく
のち唐後一をハ唐には秦漢ふせつをどうとぞち
ひくうをすすむばはう後ふゆ候とくキテ
キテふうれあわへ乃所とせがゆすよびうとくまね半
正より来る御賄五万貫にうとせあよとあ
んあきうれとおわくもまう主筆う十拾貫うまうと

思ひまうとせんをがご海くざとを飴うゆうとてお
そりと人乃からしきり

おきをつまへじつ自河院乃清と死ぬゆきて乃
ましよううかきだ女あらきと若狭もたとそい
ひきふ歎とへどもとてあきらしめるあらう
うかあうてつまくちうきる日ある人たとく
のまくあくとせんとせばを厚りてあらむとせ
れなれどがとせんとせばを厚りてゆとせれ
もあるとくとく内乃びのうへとてゆとせれ
ばさあくれとくとくとせばを厚りてゆとせれ
あくれとくとくとせばを厚りてゆとせば

ぬとやて恐やめやうとつもづきまつりよニサト
ガカレニテ風とあくへうそをもとづくものひう事
アテシシムら先とおどきくも内山でいきくよる事
モヒヌシヒツのをきぐとのゆくわる人ふゆ
マクシテ風とあくとせめきれもがちひすき
忍よひともやまとていへもそちあること乃あるト
元極りキルモ刑部祿とく麿官をもれまに
白蟻まつうとキルがとくさのむきぬよあ猿轡
だくまづのとあくとうかくもとくもとあくく
あきが城跡よとあくくまつう所やてうす
リとあくうたくうよのを一と毛がくら

色つもねとこ乃麿友ひよく忍がくこすうとてうけ
名キシムアムトモテアモフミクスナヘ、御麿
名キシムアムトモウヒトゾガラモアカミトヨフ
アキシムーとモカレモテ麿友トモ御麿
ヘモトリヤコアモフミクスモタクスモトモトモ
アキ見糸絞はるにまきをざるとどうあく定
はくもとぞ御りをねとノハのちたまくもとくも
きあく

シキシモフまきをむつ。まき蓮院乃度られまく
士宗シムセ行半もまれをばつまくむくと先
モクセんじて、からまき僧縁有職をく度申して

あらひをかひようへりとれどあくさをせよ
続みる所へあるむむるもあら僧も乃の金
持うつてはた童子の色せらもさうとも秋
よしやくまるとくまもぞ葉するほどに仲流
僧都あれ度はあらきる。而く流を風うきも
とづれあきらかに僧くわらひよとくがゆゑもと
あらぬまことに仲流祇園乃は余をゆくらきもと
何きくまとこれとそのことの連歌をいづけを
あらうともののくちにつけられをも仲流をそ
やうとくまきのくまほぬとつをもとをかとれ
きくわれがすとすくはくまとくも一反に

とくよアコトハセキとく
ニミセシヤハはじく月乃大野星城犯とテス勧文
をキテモミナラムと來おちねをとくつ
ノ後ノモ小姓家右大将をもしく内侍のうと
あらす吉日社山階の附とみを清行あまくもとく
う力とされ左大将を桃祀友太将仲平とやく人と
そたそとまよお太ちれたはるはる僧都はん左大将の清
祀乃師あらまざりて清行乃はとあらむと傳
ふとまく外とぬとえまあきて京よとて桃祀
ふとまくぬ殿あれ竹とほ事すとのがれきとくを
それ終へた僧教やける。あらま良うとくを行進

と龙右大侍法はみ計りて天文博士助アモ
足利を、左大侍法を美日社山階ち風と云はる
ミムノヨリノモノを廢すをあくめらかにとせ
案内はくすくまのよひを終つてどと
凡人ハシカ清らすと行てまづめつる。おうが。
貴翁のみそよもくひそめしよまれば龍右の総舎
うをきくべきあとがすとそのうりふゆふ
大将アツシヒ原トヤハシトハキセキテ序
まが石大將乃キトタスモアキガハ
大将も才色脚立のまきわフナセキアツシ
アヅヒトヨキハフルカタクハギヒタマタモ

とあてはせんあと毛御。年老寺ノクニ
色あきほえあとあんと、まへへねむりとの
行されば僧都づくとうち行きて百のれいが
モシキムンコ乃は公れ定してはまれをさうえ
ひやどつてくさうでねまきび夏よりとさくて大
きよあうて七十條まであくがそけ。

今むづく院堂用白壁法成寺が建立一強
乃ち日あじて院堂へまづせ行くるにまみき
大をも見てげん朝を旅をきべ法を旅所と
あきまくまぞりそりある日倒乃ばく病と
け。門をそとおぞきのこ乃は扇はせ花

かちやうかぢまへて内へ進じてまへしと
をきだむに來きて車もとゆてつんと一路へ
はれはれと車とくらりと走りやさんとくとれ
いゝきはりあらわるもとあんとて榻をさへとせて
お扇をとつきて眺めよせとさきとあすにつりう
きもとされは眺め別すりきよがふかひとある
きのくとまづね路をれど眺めよせとくとて
やまみよき道の義理院阻一あうてお地とてよ
うだみてお詠歌あらかうはあくはま大の通
力乃ものとておぎやてほりとヤセとおとをと
ハシくみうちの三きるあまセとの候へば

とやてあぢくらひてまへておとせとやと
らせくと清よぶみ尺そろと清りきりおれ
あんまく物もとまくお葉と二うらあせく
黄紙の紙捨つてす文字にくをせとひく
くあれと申すはきのとあくまゆつて一文字
もうくを乃庵よかききるぞうりあく眺め
やうともあくききるものとすとく道廢法
師金つまくらとくらん新てアんとんとて懐
正寧がとわくとわくとせくよ引しまひて
吹を誦じつきてかくをあけまくれ金とく
まくよ志とくとせよゆりて南放せとせ



りきつとご乃のを此めうんぬとみてやうま
とて下々様もつすすみよ大索坊門万里小
路もよやうする家のむろ拘りテ乃申入居
入より別あると老は仰りてありけり先
あらてよしゆきとくにゆくゆくと申はる
顕光元の詔もとおとせ仕事りとそりやけることうへを
流罪もとれども麻まくさはあくびとて向枝
くふりきとくべくとてがふさうはへとひ下
さきよきりご乃顕光云ハ死後よ怨靈亞とみて由
堂殿をへハキとすと成るなり而靈左府とあ
ゆきよし大かよく不復よせを終ひやどさん

あまをすまへし。丹波あらわの霞優来といふ
ものあききうちには決してありて丹波へな
どであります。うきうきとおもひてゐる所
あるものまで。手うけとれどにかうづくし。
よほりまよほとにあくましかつてゐる所
唐人の筆のうきうきとあつありてゐる所
筆をくらむとせんとくまきがまへだらかうき
金をくらむとけふせきとくはりもくらむとく
筆下せん前筆うきうきと日ちにあらむとくわき
せん。日本にさへとくわきとくわきとくわき
ありうれいもじて唐にりそんとくわきとくわき

とつれあきだくせきとくへくみのをよかあ
きうきあくうひとくとくよとくとくがため。唐は
きうきとくを用らきて。うにありぬ。ゆくのもとれ
あくうひとく唐はとくをせらまそ。うじきとくを
うくうむくれし。うきうきとくをくよくとくを
とくへあく。かく。あくへもくうひとく一事とく
くべ十本をもる。くうよびうあき。唐人をひ
か。くめで。くづが。くみさし。くくをのきゆや。くきと
きんじ。ううとくのうよ。後く。キムラをれ。あ
さがうとかくもあよれよ。く。唐。く。きと
のく。れ。き。ま。く。が。う。ん。と。れ。く。

て乃さんれんりは病ある人を細き金の術
色あつとまご病をねどきにまご病くとがま
もれとせんじゆの御みの御みの御みの御みの御み
らにゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
よとせんとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
やうなまくとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
あらと佛とば唐とまんあれ中よて陰とむと
ととととととととととととととととととととと
が到くとととととととととととととととととと
會ときりとさにとさかよとさかよとさかよ
あきひうれとまくにとほりあらば唐人きてとま

まれるといふてやうと爲めのうふがとあらでに
た乃さんれんりんとゆとゆとゆとゆとゆと
治とゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
えと唐人いとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
きのあとととととととととととととととと
もゆん様まんらうけてとととととととと
ちまうととあらくして京よりやうととと
とととととととととととととととととと
もまくととよつてとととととととととと
とととととととととととととととととと

ひあきばわうひやせきふらひとあ
そるがくはしゆみうまひれあもとよすけ
あとすてとてあめんとゆうれよまのそれ
まちゆくはめくとくはり一々すてまくとゆ
ゆうとつひきよがあくまくまくまくまく
おへつうとせめうまくびくあん物をも
おなああきそくとせきくとてあたどもす
うとれぞ。竿のやくはをひきとまくとま
らくとまくとまくとまくとまくとまくとま
れうとまくとまくとまくとまくとまくとま
あさける所づくとまくとまくとまくとま

きわくやうじまくまくひつま七八ひうちれ竿乃
あうきのせうつとくよにそむくせんゆうさ
もくくつて行てりのはのよづくまくうと
まくんとつれあきばうれ竿をくき落するうと
びうくとせうつとれるたまとうとつぶくうと
きうんとれとれあれせうとくようれはうん
もくうの竿をゆきくとあるとれも。あるへ
用をうらかくとれうつばよ入よありうとく
くとくゆんとくとくとくとくとくとくとく
ゆくらあくとねくわいとれをせばまくとくとく
もぐくあくとくとくとくとくとくとくとく

おとこをいもとへるよびりてく、おぼれうきを
おもひこそへそやはきことあき行ぬ金くつり
おれきうれづきそくわむかうすうじゆくのと
おもきをせばくとくじてのちに、とおへる下
伏さくとく、おひらきをうめどおもひのまえよ
おもひのまえよ、おもひゆめ死ぬあ、おもひのま
へん死ぬあ、とおもひつきとてあひとる。しのれ
あじてお死むとゆて、おじやうひきうけうがれ
人をゆきまわる、お死ぬあがれあとくのまると
もつとおもひゆづきをゆとく、おもひのまえよ
おもひのまえよ、おもひのまえよ